ISSN 0387-9844

小笠原研究年報 41 二〇一七年度

首都大学東京小笠原研究委員会

小笠原研究年報

41

2017年度
（2018年7月発行）

首都大学東京小笠原研究委員会

ISSN 0387-9844

小 笠 原 研 究 年 報

41

2017年度
（2018年7月発行）

首都大学東京小笠原研究委員会

表紙写真　父島躑躅山のシマホルトノキ（撮影：大林隆司）

小笠原研究年報　第 41 号（2017 年度）

小笠原研究年報　第 41 号（2017 年度）

目　　次

調査報告・解説

戦前の母島沖村界隈―島民の昔話から―その 1 ･････････････ 石井　良則･････････ 1
1980 年 父島断水日記 ･････････････････････････････････････ 延島　冬生････････ 23
米国施政権下小笠原諸島の返還と初等教育
　―「日本人」に「なる」ということをめぐって― ････････ 西郷　南海子････････ 47
小笠原諸島のエコツアーにおける心理的リアクタンス
　･････････････････････････････ 服部　陽太・杉本　興運・菊地　俊夫････････ 65
母島におけるシマホルトノキの果実の形態変異
　･･･ 須貝　杏子・葉山　佳代････････ 83
小笠原諸島父島の乾性低木林における 41 年間の個体群動態（予報）
　･･･ 清水　善和････････ 89
父島のクマネズミにおける広東住血線虫の寄生率低下
　･････････････････ 矢部　辰男・港　隆一・中島　卓也・橋本　琢磨･･････ 105
父島と母島におけるねずみ族と蚊族のベクターサーベイランス
　･････････････････････････････ 竹内　真人・笠井あすか・横塚　由美･･････ 111
ホラズミクチバの食餌植物と生態的知見
　･････････････････ 加賀　芳恵・木村　正明・枝　恵太郎・大林　隆司･･････ 125
小笠原諸島の土壌動物相の研究（2015 年調査）
　･････････････ 島野　智之・蛭田　眞平・富川　光・布村　昇・寺山　守
　　平野　幸彦・馬場　友希・西川　勝・鶴崎　展巨・佐藤　英文･･････ 137

研究ノート

南島で発見されたオガサワラオオコウモリの捕食死体･････････ 千葉　夕佳･･････ 145
（予報）オガサワラホソハマトビムシ（節足動物門：甲殻亜門：端脚目）
　の小笠原諸島弟島からの初記録 ･････････････････ 富川　光・島野　智之･･････ 149
父島初記録となるアオバトシラミバエの採集記録
　･･･ 田村　英之・加賀　芳恵･･････ 151

年次報告と資料

2017 年度の研究体制 ･･･ 155
2017 年度小笠原研究費会計報告 ･･･ 156
2017 年度小笠原研究施設利用者一覧 ･････････････････････････････････････ 157
2017 年度小笠原研究施設等月別利用状況 ･････････････････････････････････ 164
小笠原研究施設の利用について ･･ 165
「小笠原研究年報」と「Ogasawara Research」について ･････････････････････ 166
首都大学東京小笠原研究施設使用要綱 ･･････････････････････････････････ 172

年次報告と資料

2017 年度の研究体制

小笠原研究委員会

1．委員（規程第３条）

都市教養学部　人文社会系	教　授	山田　昌久
都市教養学部　法学系	教　授	篠田　昌志
都市教養学部　経営学系	准教授	高橋　勅徳
都市教養学部　理工学系	准教授	江口　克之
都市環境学部	教　授	菊地　俊夫
システムデザイン学部	教　授	金崎　雅博
健康福祉学部	教　授	福士　政広
大学教育センター	教　授	立花　宏
オープンユニバーシティ	准教授	稲山　貴代
都市教養学部理工学系長		住吉　孝行
首都大学東京管理部長		富澤　賢一

2．事務局

理系管理課	庶務係	淺間　博美／新島　美乃里
	庶務係長	高野　千恵子

専門部会

1．学内専門委員（規程第８条第３項）

総　括	都市教養学部　理工学系	教　授	可知　直毅
庶　務	都市教養学部　理工学系	助　教	加藤　英寿（利用窓口）
	都市環境学部	助　教	高木　悦郎（小笠原クラブ）
	都市環境学部	教　授	沼田　真也（教育プログラム）
会　計	都市教養学部　理工学系	教　授	可知　直毅
編　集	都市教養学部　人文社会系	教　授	ロング　ダニエル
	都市教養学部　理工学系	准教授	江口　克之
	都市教養学部　理工学系	教　授	可知　直毅 ※

2．学外専門委員（規程第８条第４項）

岡　　秀一（元首都大学東京都市環境学部／客員研究員）

2017 年度小笠原研究費会計報告

予　算	
1. 総　額	1,451,000 円
2. 支　出	
1）旅費 / 物品費	1,335,000 円
旅費	485,000 円
小笠原研究年報 40 号（2016 年度）/ Ogasawara Research No 43（2016 年度）印刷費	700,000 円
郵送費	10,000 円
製本費	30,000 円
ホームページ管理費	100,000 円
小笠原研究施設消耗品	10,000 円
小計	850,000 円
2）人件費　（発送リスト管理・発送・HP 管理アルバイト）	116,000 円
計	1,451,000 円

決　算	
1. 総　額	1,450,679 円
2. 支　出	
1）旅費 / 物品費	1,335,000 円
旅費	429,268 円
旅費返納分	1 円
小笠原研究年報 40 号（2016 年度）/ Ogasawara Research No 43（2016 年度）印刷費・送付費	544,644 円
郵送費	5,187 円
製本費	20,520 円
ホームページ管理費	99,360 円
ホームページ改修費	210,600 円
小笠原研究施設消耗品・ガソリン代他	25,420 円
小計	905,731 円
2）人件費　（発送リスト管理・発送・HP 管理アルバイト）	115,680 円
返　納	320 円
計	1,451,000 円

2017 年度　小笠原研究施設利用者一覧

期　間	所属・職・氏名	目　　的
29. 4. 30 ～ 29. 5. 3	理工学研究科 客員研究員　大林　隆司	小笠原の外来種対策に関する生態学的研究
29. 5. 15 ～ 29. 5. 18	理学研究科特別研究学生 （京都大学生態学研究センター） 才木真太朗 山形大学　農学部 准教授　吉村謙一	小笠原の植物の生理生態学的研究
29. 5. 15 ～ 29. 5. 18	理工学研究科 特任研究員　畑　憲治	小笠原諸島の外来生物の駆除が在来生態系に及ぼす影響の評価に関する研究
29. 6. 3 ～ 29. 6. 13	理工学研究科 生命科学専攻 山田　旭 中山綾香	小笠原諸島の生物多様性とその保全に関する研究
29. 6. 3 ～ 29. 7. 2	理工学研究科　生命科学専攻 助教　加藤英寿 客員研究員　川上和人 （国立研究開発法人　森林総合研究所）	小笠原諸島の生物多様性とその保全に関する研究
29. 6. 3 ～ 29. 6. 26	理工学研究科 客員研究員　千葉　聡 （東北大学） 客員研究員　保坂健太郎 （国立科学博物館 植物研究部） 客員研究員　和田慎一朗	小笠原諸島の生物多様性とその保全に関する研究
29. 6. 3 ～ 29. 7. 2	理工学研究科 客員研究員　苅部治紀 （神奈川県立生命の星･地球博物館） 客員研究員　高山浩司 （ふじのくに地球環境史ミュージアム） 客員研究員　森　英章 （（財）自然環境研究センター） 客室研究員　朱宮丈春 （財団法人日本自然保護協会） 小笠原自然文化研究所 天野和明 松本省二 宮城公博 淀川裕司	小笠原諸島の生物多様性とその保全に関する研究
29. 6. 29 ～ 29. 7. 16	理工学研究科 客員研究員　川上和人 （森林総合研究所 主任研究員）	小笠原の鳥類相と生態に関する研究

29. 6. 29 ～ 29. 7. 20	理工学研究科 特任研究員　畑　憲治	小笠原諸島の外来生物の駆除が在来生態系に及ぼす影響の評価に関する研究
29. 7. 3 ～ 29. 7. 7	理工学研究科 客員研究員　佐々木哲朗 （小笠原自然文化研究所 研究員）	南硫黄島の生物相調査
29. 7. 3 ～ 29. 7. 9	理工学研究科 客員研究員　森　英章 （自然環境研究センター 研究員）	小笠原諸島における希少昆虫および陸産貝類の生息域外保全に関する研究
29. 7. 6 ～ 29. 7. 16	都市教養学部　理工学系 学部生　多田浩優	小笠原諸島の外来生物の駆除が在来生態系に及ぼす影響の評価に関する研究
29. 7. 22 ～ 29. 7. 27	理工学研究科 客員研究員　笹井あすか （東京検疫所 検疫衛生課） 客員研究員　竹内真人 （東京検疫所 検疫衛生課） 小笠原総合事務所 検疫主査　榎本真也	小笠原父島二見港における検疫感染症等媒介動物の生息状況調査試行と定期的な港湾衛星調査実施の検討
29. 7. 23 ～ 29. 7. 27	理工学研究科 客員研究員　石田　厚 （京都大学 生態学研究センター 教授）	小笠原の植物の生理生態学的研究
29. 7. 23 ～ 29. 8. 3	京都大学　生態学研究センター 研究員　辻　祥子	小笠原の植物の生理生態学的研究
29. 7. 23 ～ 29. 8. 6	北里大学　海洋生命科学部 河田　凛	小笠原の植物の生理生態学的研究
29. 7. 23 ～ 29. 8. 13	京都大学　生態学研究センター 研究生　松山　秦	小笠原の植物の生理生態学的研究
29. 8. 3 ～ 29. 8. 10	山形大学　農学部 准教授　吉村謙一 日本大学　生物資源科学部 木村芙久 日本大学　生物資源科学部 山形航大	小笠原の植物の生理生態学的研究
29. 8. 3 ～ 29. 8. 10	理工学研究科 客員研究員　鈴木　創 （小笠原自然文化研究所 研究員） 京都大学　農学部　森林科学科 八鹿　柾	オガサワラオオコウモリの糞中 DNA 調査

29. 8. 6 ～ 29. 8. 13	北里大学　一般教養学部 　講師　坂田　剛	小笠原の植物の生理生態学的研究
29. 8. 13 ～ 29. 8. 17	人文科学研究科 　教授　ロング・ダニエル 人文科学研究科 　客員研究員　李　舜炯 　(国立慶大北大学校 専任講師) 人文科学研究科 　甲賀真広 人文・社会系　高野　駿 人文・社会系　田中美緒	『小笠原ことばしゃべる辞典』増訂版に向けた言語調査
29. 8. 17 ～ 29. 8. 20	理工学研究科 　教授 可知直毅	教養科目「自然と社会と文化」小笠原コース
29. 8. 23 ～ 29. 8. 29	理工学研究科 　客員研究員　清水善和 　(駒沢大学 教授) 駒澤大学　総合教育研究部 　非常勤講師　大槻　涼	小笠諸島原における植生変化と生態系保全に関する生態学的研究
29. 9. 2 ～ 29. 9. 5	システムデザイン研究科 インダストリアルアート学域 　准教授　難波　治	国立公園・世界自然遺産としての小笠原島の環境保全のための移動体の電動化可能性研究
29. 9. 2 ～ 29. 9. 5	茨城大学　理学部生物科学領域 　教授　山村靖夫 茨城大学大学院　理工学研究科 　住谷和彦 茨城大学大学院　理工学研究科 　森脇美貴	小笠原諸島の外来植物が在来生態系に及ぼす影響の評価に関する研究
29. 9. 3 ～ 29. 9. 12	理工学研究科　生命科学専攻 　助教　加藤英寿 生命科学専攻　山田　旭 Royal Botanic Gardens, Kew 　職員　Alice Taylor	小笠原諸島の生物多様性とその保全に関する研究
29. 9. 3 ～ 29. 9. 18	理工学研究科 　特任研究員　畑　憲治 理工学系生命科学コース 　江口　碧 理工学系生命科学コース 　松永香織	小笠原諸島の外来植物が在来生態系に及ぼす影響の評価に関する研究

29. 9. 9 ～ 29. 9. 18	理工学研究科 客員研究員　堀越和夫 （小笠原自然文化研究所 理事長） 京都大学　農学研究科　森林科学専攻 小村　健人	小笠原諸島における絶滅危惧海鳥の食性の解明
29. 9. 9 ～ 29. 9. 12	茨木大学大学院　理工学研究科 教授　山村靖夫 茨城大学大学院　理工学研究科 住谷和彦 茨城大学大学院　理工学研究科 森脇美貴	小笠原諸島の外来植物が在来生態系に及ぼす影響の評価に関する研究
29. 9. 12 ～ 29. 9. 18	理工学研究科 客員研究員　千葉　聡 （東北大学東北アジア研究センター 教授） 東北大学 生命科学研究科 内田翔太	小笠原諸島における陸産貝類の保全に関する研究
29. 9. 30 ～ 29. 3. 31	環境省小笠原自然保護官事務所 首席自然保護官　岸　秀蔵 自然保護官　黒江隆太 派遣職員　稲田真由 自然環境研究センター 主任研究員　小山田佑輔 研究員　鶴　智之 研究員　涌井　茜 研究員　笠原崇吾	関東地方環境事務所との協定および覚書に基づくオガサワラハンミョウの飼育実験
29. 10. 5 ～ 29. 10. 15	首都大学東京　理工学研究科 客員研究員　笠井　あすか （東京検疫所 検疫医療専門職） 東京検疫所 検疫衛生課 食品衛生専門職　竹内真人 小笠原総合事務所 検疫主査　榎本真也 国立感染症研究所　昆虫医科学部 津田良夫 国立感染症研究所　昆虫医科学部 前川芳秀 東京都島しょ保健所　小笠原出張所 副所長　佐藤正子 獣医師　木村哲子	小笠原父島二見港における定期的な港湾衛生調査実施の検討と父島・母島における蚊媒介性疾患媒介蚊生息状況調査試行（協定にもとづく使用）
29. 10. 12 ～ 29. 10. 15	首都大学東京　理工学研究科生命科学専攻 准教授　菅原　敬	小笠原固有植物の花形態、特に花粉形態と送粉に関する調査

29. 10. 12 ～ 29. 10. 22	首都大学東京 都市教養学部 生命科学コース 宮川彩花	小笠原固有植物の花形態、特に花粉形態と送粉に関する調査
29. 11. 16 ～ 29. 11. 19	理工学研究科 客員研究員　石田　厚 （京都大学生態学研究センター 教授） 京都大学　生態学研究センター 研究生　松山　秦 ペンシルバニア州立大学（米国） 教授　Marc Abrams バルヤ アロンコン ラジャバット大学（タイ） 講師　Ananya Popradit コーンケーン大学（タイ） Issara Phromma	小笠原の植物の生理生態学的研究
29. 11. 24 ～ 29. 11. 27	理工学研究科 特任研究員　畑　憲治	小笠原諸島の外来生物の駆除が在来生態系に及ぼす影響の評価に関する研究
29. 12. 18 ～ 29. 12. 21	理工学研究科 客員研究員　織　朱實 （上智大学 地球環境学研究科 教授）	小笠原諸島のネズミ対策におけるリスクコミュニケーションの研究
29. 12. 23 ～ 29. 12. 27	理工学研究科 客員研究員　織　朱實 （上智大学 地球環境学研究科 教授）	小笠原諸島のネズミ対策におけるリスクコミュニケーションの研究
30. 1. 7 ～ 30. 1. 10	理工学研究科 客員研究員　石田　厚（代表者） （京都大学 生態学研究センター 教授） 理工学研究科 客員研究員　相川真一 （日本森林技術協会 研究員） 山形大学　農学部 准教授　吉村謙一	小笠原の植物の生理生態学的研究
30. 2. 21 ～ 30. 2. 24	都市環境科学研究科　地理環境科学域 教授　松山　洋	小笠原における水資源の調査
30. 2. 21 ～ 30. 3. 2	首都大学東京大学　理工学研究科 客員研究員　苅部治紀 （神奈川県立生命の星・地球博物館 主任学芸員） 神奈川県立生命の星・地球博物館 外来研究員　加賀玲子	小笠原諸島の在来昆虫の生態とその保全に関する研究

30. 3. 5 ～ 30. 3. 14	首都大学東京　理工学研究科 　客員研究員　堀越和夫 　（小笠原自然文化研究所 理事長） Jacinto Gordillo 高等学校 　2年　ロベルト・カルロス・ 　　レオン・フロール Jacinto Gordillo 高等学校 　1年　ファニー・フィオレジャ・ 　　ルイス・ハリン Liceo Naval 高等学校 　3年　アンジー・フィオレジャ・ 　　ビスエテ・モレアーノ Tomas de Berlanga 高等学校 　3年　トビアス・セバスティ 　　アン・カストロ・クゲレ 東京工業高等専門学校 　2年　奥野璃生	小笠原諸島における生物相とその保全に関する研究およびガラパゴスの高校生との交流
30. 3. 5 ～ 30. 3. 8	理工学研究科 　特任研究員　畑　憲治	小笠原諸島の外来植物が在来生態系に及ぼす影響の評価に関する研究
30. 3. 5 ～ 30. 3. 8	チャールズ・ダーウィン財団 　職員　ジョハンナ・エリサベス・ 　　カリオン・ロペス Tomas de Berlanga 高等学校 　1年　アレハンドロ・エマヌ 　　エル・カリオン・ロペス 日本ガラパゴスの会 　ボランテイア　赤間亜希	小笠原諸島における生物相とその保全に関する研究およびガラパゴスの高校生との交流
30. 3. 5 ～ 30. 3. 14	理工学研究科 　客員研究員　堀越和夫 　（小笠原自然文化研究所 理事長） Jacinto Gordillo 高等学校 　2年　ロベルト・カルロス・ 　　レオン・フロール Tomas de Berlanga 高等学校 　1年　ファニー・フィオレジャ・ 　　ルイス・ハリン Liceo Naval 高等学校 　3年　アンジー・フィオレジャ・ 　　ビスエテ・モレアーノ Tomas de Berlanga 高等学校 　3年　トビアス・セバスティ 　　アン・カストロ・クゲレ 東京工業高等専門学校 　2年　奥野璃生	小笠原諸島における生物相とその保全に関する研究およびガラパゴスの高校生との交流

30. 3. 23 ～ 30. 3. 26	理工学研究科　生命科学専攻 　教授　可知直毅	首都大学東京と小笠原高校との連携に関する打合せおよび講演会（母島）での講演
30. 3. 11 ～ 30. 3. 14	都市環境学部 自然・ツーリズムコース３年 　小野塚瑞季 自然・ツーリズムコース３年 　水上智絵	小笠原における自然ツーリズムの基礎的調査
30. 3. 11 ～ 30. 3. 20	首都大学東京　理工学研究科 　客員研究員　高山浩司 　（京都大学大学院 理学研究科 　准教授） 京都大学 理学部 　３年　西村明洋	小笠原諸島の生物多様性に関する研究
30. 3. 17 ～ 30. 3. 21	京都大学大学院　理学研究科 　教授　田村　実	小笠原諸島の生物多様性に関する研究
30. 3. 23 ～ 30. 3. 26	首都大学東京　理工学研究科生命科学専攻 　教授　可知直毅	首都大学東京と小笠原高校との連携に関する打ち合わせ及び講演会（母島）での公演
30. 3. 29 ～ 30. 4. 1	人文科学研究科 　教授　　ロング・ダニエル 人文・社会系 　学部生　高野　駿	小笠原ことばの実態調査

2017年度　小笠原研究施設等月別利用状況

（単位、人・日）

区分			4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
施設利用者	教員職員	実利用者数	0	2 (1)	2	2	7 (3)	5 (2)	1	4 (3)	0	1 (1)	1	4 (1)	29 (11)
		延利用者数	0	8 (4)	30	22	40 (23)	38 (8)	4	16 (12)	0	4 (4)	4	16 (4)	182 (55)
	院生学部生	実利用者数	0	1 (1)	2	2 (1)	20 (4)	9 (6)	1	1 (1)	0	0 (0)	0	4 (1)	40 (14)
		延利用者数	0	47 (4)	22	20 (9)	97 (30)	75 (33)	11	4 (4)	0	0 (0)	0	22 (10)	298 (90)
	客員研究員研究生研修員	実利用者数	1 (1)	0 (0)	12 (11)	16 (16)	5 (5)	3 (3)	7 (7)	1 (1)	2 (2)	2 (2)	2 (2)	12 (12)	63 (62)
		延利用者数	4 (4)	0 (0)	298 (274)	78 (78)	36 (36)	27 (27)	77 (77)	4 (4)	9 (9)	8 (8)	8 (8)	86 (86)	635 (611)
	環境省・自然環境研究センター職員	実利用者数	0 (0)	0 (0)	1 (1)	2 (2)	0 (0)	7 (7)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	10 (10)
		延利用者数			28 (28)	9 (9)		76 (76)							113 (113)
	月計	実利用者数	1 (1)	3 (2)	17 (12)	22 (19)	32 (12)	24 (18)	9 (7)	6 (5)	2 (2)	3 (3)	3 (2)	20 (14)	142 (97)
		延利用者数	4 (4)	55 (8)	378 (302)	129 (96)	173 (89)	216 (144)	92 (77)	24 (20)	9 (9)	12 (12)	12 (8)	124 (100)	1228 (869)
調査車利用状況		延利用日数	0	3	10	12	8	15	0	4	0	0	2	4	58
		延走行距離数	0	48	193	103	143	279	0	196	0	0	150	91	1203
		当月最終走行距離	12444	12492	12685	12788	12931	13210	13210	13406	0	0	150	241	
27年度月計		実利用者数	11 (0)	19 (4)	30 (4)	34 (6)	29 (4)	36 (9)	37 (11)	35 (4)	26 (4)	17 (1)	28 (10)	52 (16)	221 (88)
		延利用者数	0 (0)	97 (40)	153 (33)	289 (68)	108 (26)	166 (52)	132 (78)	144 (25)	60 (12)	22 (11)	109 (82)	160 (64)	1977 (1028)

（注意）

1　延利用者数は、3泊4日の場合、4人として計上した。

2　（　　）内の数は、本学に籍を持たない共同研究者であり、内数とした。

3　教員には、名誉教授を含む。

4　業者は、客員研究員研究生研修員の（　　）に入れた。

※　12月1日から車両更新

小笠原研究施設利用について

1. 小笠原での研究計画が具体的に決まったら、小笠原研究年報に記載の「首都大学東京小笠原研究施設使用要綱」をよく読み、施設使用の申請書を、使用開始希望日の２週間前までに小笠原施設利用窓口に出してください。2018 年度の担当は、南大沢キャンパス・理学研究科生命科学専攻・牧野標本館の加藤英寿（katohide@tmu.ac.jp、外線 042-677-2423、内線 2726）です。
2. 申請書には申請者の氏名、所属、身分、および施設使用者の氏名、所属、身分、目的、使用期間を明記してください。申請者は本学所属の教職員（名誉教授，客員教員、特任研究員を含む）に限ります。小笠原に関連する研究課題を持つ本学大学院生および卒業研究生は指導教員を申請者にし、施設使用者として申請できます。また、本学での身分を持たない学外共同研究者の場合は、本学所属の利用者に同行することを原則とし、施設使用者欄に氏名、所属、身分を記入してください。
3. 使用許可がおりた後、出発の前日までに理系管理課庶務係（理工学系事務室）で施設使用許可書、施設利用マニュアル、施設の鍵を受け取ってください。
4. 施設の使用に当たっては、「小笠原研究施設使用マニュアル」をよく読み、間違いのないようにしてください。
5. 帰学後、必ず研究施設使用報告書を理系管理課庶務係に提出してください。
6. 施設使用マニュアル、申請書等の様式は、小笠原研究委員会のホームページ（http://www.tmu-ogasawara.jp/）からもダウンロードできます。

「小笠原研究年報」と「Ogasawara Research」について

小笠原研究委員会は、「小笠原研究年報」と「Ogasawara Research（小笠原研究）」の 2 種類の出版物を刊行している。「小笠原研究年報」は様々な分野・機関での研究の交流と、本学の小笠原研究成果などに関する情報を広く一般に提供することが目的である。「Ogasawara Research（小笠原研究）」は、小笠原に関係するオリジナルな学術論文、調査報告、総説および、生物相のリストや気象情報など基盤的なデータを掲載する。両出版物ともに毎年 5 月に刊行し、原稿〆切は 1 月 20 日である。「小笠原研究年報」の印刷部数は 500 部で、著者には抜刷 50 部を提供する。「Ogasawara Research（小笠原研究）」の印刷部数は 400 部で、うち 30 部は著者渡し。両出版物とも学外からの投稿も歓迎する。投稿要領および原稿の体裁見本は、小笠原研究委員会のホームページの「刊行物」（http://www.tmu-ogasawara.jp/about_ogasawara_research.html）からダウンロードできる。

既刊号の入手に関する問い合わせ先は、小笠原研究委員会（island@tmu.ac.jp）である。なお、2005 年度以後の「小笠原研究年報」と「Ogasawara Research」は、首都大学東京の機関リポジトリ「みやこどり」（https://tokyo-metro-u.repo.nii.ac.jp/index.php）で PDF 版が公開されている。

「小笠原研究年報」投稿要領

原稿はワープロソフト（Microsoft Word）を使って作成する（A4 横書）。

投稿に際して希少生物等の保全に対して十分配慮すること。

【原稿の体裁と執筆要領】

1．原稿の構成

原稿の体裁については、【小笠原研究年報のひな形】の項目を参照されたい。

1）表紙

タイトル、著者名、著者のローマ字表記、著者の連絡先（住所、電話番号、ファックス番号、E-mail アドレス）を記入する。

2）本文 1 ページ目

1 行目にタイトル（中央揃え）を書く。2 行目は空白とし、3 行目以後に著者名（所属）を記入する（共著者が 3 名の場合は 3 ～ 5 行目に記入）。著者名（所属）の後に空白行を 1 行入れる。

3）要約

要約は 300 字以内とする。

4）本文

本文中の見出しは以下のようにする。

Ⅰ．はじめに

Ⅱ．材料と方法　1．調査地の概要

さらに細かい小見出しは著者にまかせる。 本文中ではカンマとピリオド（, .）ではなく句読点（、。）を使用する。

Ⅲ．結果

Ⅳ．考察

謝辞

引用文献

2. 単位・数量の書き方

メートル法に準拠する（例：1/3、10%、15 m、40 km、63 g、3.5 t など）。

3. 本文中での文献の引用の仕方

上付きの[1]などは用いない。日本語文献は、著者が 2 名以下の場合は「伊藤（1993）、内田・松田（1990）によると・・」、著者が 3 名以上の場合は「木村ら（1993）によると・・」のように引用する。文末の（ ）内での引用は「・・が知られている（内田・松田、1990; Wilson *et al.*, 1992）。」や「・・である（上田ほか、1993）。」のように引用する（*et al.* はイタリックで表記。（ ）内の複数文献は半角のセミコロンで区切る）。

欧文文献は、Balford & Thomas (1992)、3 名以上は Burleu *et al.* (1982) のように引用する。文末の（ ）内での引用は、「・・が知られている（Balford & Thomas, 1992; Wilson *et al.*, 1992）。」のように引用する。

4. 引用文献の書き方

文献の言語にかかわらず第一著者の姓をアルファベット綴りした場合の、アルファベット順に並べる。同じ著者名が続いた場合も省略しない。雑誌名や Proceedings のタイトルは省略しない。<u>各文献の最後のピリオドは、日本語・英語ともに半角のピリオドとする。</u>

日本語の論文

町田　洋・新井房夫（1978）南九州鬼界カルデラから噴出したテルラーアカホヤ火山灰．第四紀研究 17: 143-163.

日本語の報告書

加藤芳郎・宇津川徹（1981）父島の土壌．小笠原諸島自然環境現況調査報告書（2）．東京都，133-142.

日本語の単行本

町田　洋・新井房夫（1992）『火山灰アトラス』東京大学出版会，276p.

日本語の単行本の一部

黒田　直（1992）土壌．小笠原自然環境研究会（編）『フィールドガイド小笠原の自然―東洋のガラパゴス』古今書院，46-51.

欧文の論文

Aubry MP, Berggren WA & Kent DV (1988) Paleogene geochronology; an integrated approach. *Paleoceanography* 3: 707-742.

雑誌のタイトルはイタリックにする。

欧文の報告書

Olsen RR & Cameron JL (1993) Larval development of the pencil urchin. *Proceedings of 6th International Echinoderm Conference*, 807p.

報告書のタイトルはイタリックにする。

欧文の単行本

Fagri K & van der Piji L (Eds.) (1979) *The Principles of Pollination Ecology*. Pergamon Press, 500p.

本のタイトルはイタリックにする。

欧文の単行本の一部

Hori R, Pang VPE & Jin LT (1991) On the pattern of gonadal development of the sea urchin. In: *Biology of Echinodermata* (Ed. by Yanagisawa *et al.*), 249-255.

本のタイトルはイタリックにする。

5. 表

表は１つずつ別紙に書く。１つの表は原則として１ページに印刷できる大きさとする。１ページを越える表については２ページ以上に分割する。表のタイトルと説明は表の先頭に書く。各表のタイトルと説明は、まず「**表 1**」（MS ゴチック）と書き、ついで**タイ**

トル（MS ゴチック）を挙げたのち、本文を読まなくとも理解できる程度に説明（MS 明朝）を加える。

6. 図

各図をそれぞれ別紙にして、そのまま製版できる状態のものを本文の最後に順番に添付する。カラー図版を希望する場合は事前に編集委員会に相談すること。図の説明は別紙にまとめて書く。各図の説明は、まず「**図 1**」（MS ゴチック）のように書き、ついで**タイトル**（MS ゴチック）を挙げたのち、本文を読まなくとも理解できる程度に、説明（MS 明朝）を加える。図の作画者や写真の撮影者が著者と異なるときは、そのことを明記し、また必要な場合は、著者においてあらかじめ著作権者の許可を受けておくこと。

【投稿と編集】

原稿〆切は原則として毎年 1 月 20 日とする。原稿の掲載可否は編集委員で決定する。E-mail の添付ファイルあるいは CD-R 等で編集委員会宛に送付する。なお、添付ファイルの上限は 10MB とする。本文は Microsoft Word で作成し、1 つのファイルにする（一太郎等で作成した場合は Word 形式に変換）。使用するフォントは、小見出しは MS ゴシック、それ以外は MS 明朝とする。表は Microsoft Excel で作成する。複数の表が存在する場合は、表ごとにファイルを作成するか、1 つのファイルに別シートとして作成する。図は、画像ファイル（EPS、TIFF、JPEG などの形式）として作成する。複数の図が存在する場合は、図ごとにファイルを作成する。

【校正】

原則として初校の校正は著者が行ない、再校以降は編集者が行う。著者校正は印刷上の誤りについてだけ行ない、内容や図表の変更は認められない。

【抜刷】

30 部を著者に無料で提供する。

「Ogasawara Research（小笠原研究）」投稿要領

主として小笠原に関係するオリジナルな学術論文、調査報告、総説および、生物相のリストや気象情報など基盤的なデータを含む長い報文を優先するが、短い報文も編集委員会の判断で掲載する場合がある。投稿に際して、希少生物等の保全に対して十分に配慮すること。

【原稿の体裁と執筆要領】

英文、和文ともワープロソフト（Microsoft Word）を使用し、そのまま製版できるように図表を貼りこんだ原稿（A4、横書き）を作成する。和文原稿の場合の体裁は、【Ogasawara Research（小笠原研究）のひな形（和文の場合）】の項目を参照すること。和文報文には英文要旨を、英文報文には和文要旨をつける。章節のたて方は基本的に著者に任せるが、脚注はできるだけ用いない。

文献引用の仕方、文献リストの書き方は和文報文の場合、日本生態学会の和文誌である「日本生態学会誌」の規定を、英文報文の場合、日本生態学会の英文誌である「Ecological Research」を標準として参考とされたい。詳しい情報は、日本生態学のウェブサイト（http://www.esj.ne.jp/esj/）の日本生態学会誌投稿規定のページおよびEcological Researchのウェブサイト（http://www.springer.com/11284）に記載されている。

【投稿と編集】

原稿〆切は原則として毎年1月20日である。電子ファイルとプリントアウト1部を編集委員会あてに送付する。電子ファイルは、「本文」はMicrosoft Word、「表」はMicrosoft Excel、「図・写真」はEPS、TIFF、JPEGなどの形式とするか、これらのファイルを1つのPDFファイルにまとめたものとする。他の著作からの図表を引用する場合は、著者の責任で出版社など著作権者の了解を取ること。投稿は首都大学東京関係者以外からも受け付ける。原稿の掲載可否は編集委員会で決定する。編集は、論文の内容によっては編集委員長が委任する臨時の編集委員によって行われる場合がある。なお、出版費用が限られているので、投稿予定がある場合は12月中に編集委員会に前もって相談すること。

【校正】

原稿はそのまま製版され、校正をできないので、投稿時に十分注意すること。

投稿者へのお願い

今後、「小笠原研究年報」「Ogasawara Research」掲載の報文の全文あるいはその一部がインターネット文献検索サイト上に掲載されることも多くなると思われます。委員会宛に要請のあったものについてはできるだけ協力していきたいと考えておりますが、その中には「著作権の処理」をすませておく必要のあるものもあります。そこで、投稿される報文につきまして、あらかじめ電子化・公開することの許諾をいただければと存じます。特にご異存なければこのページをコピーし，下段の許諾書に署名または捺印の上、小笠原研究委員会宛お送り下さい。

なお許諾を頂けない場合はその旨お知らせいただければ幸いです。

小笠原研究委員会

許　諾　書

小笠原研究委員会　殿

年度「小笠原研究年報」「Ogasawara Research」掲載の自著報文類の電子化・公開については、これを許諾します.

年　　月　　日

氏名：

※ 著者が複数の場合はこの用紙にまとめて署名してもけっこうです。

首都大学東京小笠原研究施設使用要綱

（趣　旨）

第 一 条　この要綱は、首都大学東京小笠原研究委員会規程第９条に基づき、首都大学東京小笠原研究施設（以下「小笠原施設」という。）の使用について、必要な事項を定めるものとする。

（使用目的）

第 二 条　小笠原施設の使用は、小笠原諸島の自然及び社会を研究するとともに、同諸島の発展に基礎的分野で貢献することを目的とする。

（使用資格）

第 三 条　小笠原施設を使用できる者は次の各号の一に該当する者とする。

一　本学の教職員（名誉教授及び客員教授（研究員）を含む。以下同じ）。

二　本学の学生

三　本学の教職員の共同研究者

２　前項第二号及び第三号に規定するものにあっては、原則として、本学教職員に同行するものとする。

（使用手続）

第 四 条　小笠原施設を使用しようとするものは、別記様式第１号により小笠原研究委員会委員長（以下「委員長」という。）に申請しなければならない。

２　委員長は、使用を認めたときは、別記様式第２号により使用許可を通知するものとする。

３　使用者は、使用許可証を所持し、必要に応じて提示しなければならない。

（使用者の義務）

第 五 条　使用者は、別に定める使用者心得を守り、施設、設備を良好な状態に保つように努めなければならない。

（現状回復等）

第 六 条　使用者は、その責に帰する事由により、建物、設備及び備品等をき損、汚染又は滅失したときは、現状に回復し又はその損害を賠償しなければならない。

（転貸等の禁止）

第 七 条　使用者は、小笠原施設をその用途以外に使用し、又は他の者に使用させてはならない。

（使用許可の取消）

第 八 条　委員長は、使用者が次の各号の一に該当する場合には使用の途中であっても使用許可を取り消すことができる。

一　申請の内容に虚偽があったとき。

二　使用者心得を守らないとき。

2　使用許可の取消しによって生ずる使用者の損害に関しては、使用者自らがその責を負うものとする。

（使用期限の延長）

第 九 条　研究上その他の理由で使用期限の延長が必要となった場合は、事前に委員長に期限延長を申請し、その許可を得なければならない。

（使用報告書の提出）

第 十 条　使用者は、使用報告書を使用終了後、別記様式第３号により速やかに委員長に報告しなければならない。

（調査用自動車の使用）

第十一条　小笠原施設の調査用自動車を使用する場合は、施設の使用を申請するに併せて別記様式第４号により、使用の許可を理系管理課長に申請するものとする。

2　調査用自動車の使用は本学の教職員に限る。

3　使用者は、調査用自動車運転日誌を、別記様式第５号により提出しなければならない。

（展示ホールの公開）

第十二条　小笠原施設の展示ホールは、使用者の滞在中、住民の見学に供されるものとする。

（研究成果）

第十三条　小笠原施設においてなされた研究の成果は、小笠原施設の研究業績として登録されるものとする。

（その他）

第十四条　使用者は、この要綱に定めるもののほか、小笠原研究委員会が定める指示に従わなければならない。

様式第１号

整理番号　　－

首都大学東京小笠原研究施設使用申請書
Application for the Use of Ogasawara Field Research Station

年(Year)　月(Month)　日(Day)

小笠原研究委員会委員長　殿 To Chairperson of the Ogasawara Research Committee

所属　Affiliation

職　Title

氏名　Full name

電話（内線）Tel no. (Ext. no.)

下記の通り施設使用を申請します。 I hereby apply as follows:

記

１．目　的（研究テーマ）Research theme

２．使　用　期　間 Period of use

自 From　　年(Year)　月(Month)　日(Day)

至 To　　年(Year)　月(Month)　日(Day)（　名 No. of people ×　日 No. of days　延べ　日 Total no. of days）

注）同一グループに使用期間が異なるメンバーが含まれる場合は、使用期間ごとに複数の申請書に分けて申請してください。 If the period of use is different in members of the group, please submit a separate application form for each period.

３．使用者所属・職（または学年）・氏名 Affiliation, title (or school year), and name of all users

※上記使用者にグループ代表者が含まれない場合　代表者氏名 Representative of the group：

* If a representative of the group is not included in “3” above, please write the name.

４．調査用自動車 University-owned vehicle for research

１．使用する Required　２．使用しない Not required　（どちらかを消す）Delete the one you do NOT choose.

※以下は記入不要です。Office use only

平成　年　月　日

上記申請について　許可　・　不許可　とする。

委 員 長	総務担当

事務局	管理課長	庶務係長	担　当

様式第３号

整理番号　　－

首都大学東京小笠原研究施設使用報告書
Report of the Use of Ogasawara Field Research Station

年(Year)　月(Month)　日(Day)

小笠原研究委員会委員長　殿　To Chairperson of the Ogasawara Research Committee

所属　Affiliation

職　Title

氏名　Full name

電話（内線）Tel no. (Ext. no.)

下記の通り施設を使用しましたので報告します。I hereby report as follows:

記

１．目　的（研究テーマ）Research theme

２．使　用　期　間 Period of use

自 From　　年(Year)　月(Month)　日(Day)

至 To　　年(Year)　月(Month)　日(Day)（　名 No. of people ×　日 No. of days　延べ　日 Total no. of days）

注）同一グループに使用期間が異なるメンバーが含まれる場合は、使用期間ごとに複数の報告書に分けて報告してください。 If the period of use is different in members of the group, please submit a separate report form for each period.

３．使用者所属・職（または学年）・氏名　Affiliation, title (or school year), and name of all users

※上記使用者にグループ代表者が含まれない場合　代表者氏名 Representative of the group：

* If a representative of the group is not included in “3” above, please write the name.

４．調査用自動車　University-owned vehicle for research

１．使用した Used　　年(Year)　月(Month)　日(Day)　～　　年(Year)　月(Month)　日(Day)

２．使用しなかった Did not use

５．その他（施設の最終点検・異常等）Other (Final check on facility, etc.)

☐ 浴室・台所・湯沸器のガス元栓 Turned off the main valve (bathroom/kitchen/water-heater)　☐ 施錠（窓、出入口）Locked up (windows/door)　☐ 各室消灯 Switched the light off (each room)

☐ 引継（他のグループ代表者氏名：　　）Took-over to: (Representative of other group　　)

☐ その他 Other

※以下は記入不要です。　Office use only

報告内容について確認しました。　平成　　年　　月　　日

委員長

事務局	管理課長	庶務係長	担　当

小　笠　原　調　査　報　告　書

年　　月　　日提出

1　研究テーマ

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

2　研究代表者

氏　　名 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

所　　属 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

住　　所 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

電話／ファックス ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

E-mail ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

3　共同研究者氏名（所属・学年／身分）　（研究協力者を含む）

4　研究期間（西暦）　　年　　月　　日　～　　年　　月　　日

5　小笠原研究施設利用　　有　　無　（該当する方に○）

6　調査の概要（書き切れない場合は別紙に）

1）調査対象地域

2）調査内容（400字程度）

本報告書は小笠原研究施設使用報告書とともに理系事務室庶務係に提出してください。E-mailで提出することもできます。上記の報告内容を、island@tmu.ac.jpあてに送って下さい。小笠原研究施設を利用しなかった場合、および複数年にまたがる研究の場合は、各年度末までに小笠原研究委員会または上記のメールアドレスに提出してください。

〈編集担当者〉

編集委員長　可　知　直　毅（理工学研究科　教授）

編集委員　　ロング　ダニエル（人文科学研究科　教授）

編集委員　　江　口　克　之（理工学研究科　准教授）

編集補助　　畑　　憲　治（理工学研究科　特任研究員）

編集補助　　加賀屋　美津子（理工学研究科　リサーチアシスタント）

印刷・発行日：2018年7月31日

発行者：首都大学東京小笠原研究委員会
委員長　菊　地　　俊　夫
〒192－0397 東京都八王子市南大沢1－1
首都大学東京　理系事務室庶務係
メールアドレス　island@tmu.ac.jp
ウェブサイト　　http://www/tmu-ogasawara.jp/

印　刷：（株）相模プリント
〒252-0144 神奈川県相模原市緑区東橋本1-14-17
電話 042－772－1275

古紙配合率70%再生紙を使用しています